



潜水調査を行う北川漁協の組合員ら

北川・潜水調査 アユやハゼ「視界も悪くない」 漁協と大分 県企業局 ダム下流「少し汚れも」

昨年12月に北川ダム湖のを受けて、北川漁業協とダムを管理する大分県などで大量の魚が死んだ。同組合長瀬二二組合長「企業局はこのほど、北川



潜水調査で見られたテナガエビ
(北川漁協提供)



ヨシノボリ

本流の現状を把握するために初の合同潜水調査を行った。

昨年12月、北川ダム湖ではコイ科のモツゴやハスなどが、下赤ダム湖下流の北川町八戸周辺ではアユやボウスハゼなどが大量に死んでいるのが見つかつた。大分県企業局は調査の結果、酸欠が原因だと推定している。

今回の調査は、北川本流4カ所と比較対象の北川支流・小川2カ所で行った。魚種や水生昆虫の種類、魚の数、河床の状況について、同漁協から依頼を受けた「延岡マリンサーブ」の高橋勝栄さんが

潜って確認し、映像と写真で記録。長瀬組合長ら同漁協の組合員5人も潜って確認した。

八戸や白石地区では、アユやボウスハゼなどの魚が見られ、視界も悪くない状態。また、アユの餌となるコケを生えやすくするためにと川底の石を磨く「マイストーン作戦」を行っている堀切では、石の上に魚の姿があ

り、作戦の一定の効果が見られていることに参加者は笑顔をみせていた。

一方、下赤ダムのすぐ下流では、魚の姿は見られなかったものの、潜った高橋さんは「ホコリみたいなものがたまっている所があり、ほかの場所に比べて少し汚れている感じがした」と話した。

北川漁協と大分県企業局は今後、梅雨明けの川の濁りが無い時に2回目の潜水調査を行い、結果などをまとめる予定。同局の木下研舟主任は「一緒に現場を見ることができて貴重な経験になっていききたい」。長瀬組合長は「合同で行うことには大きな意義がある。調査結果を一つのデータとして議論していきたい」と話していた。